

第1次世界大戦から100年（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2014/7/8 7:00 | 日本経済新聞 電子版

空港からホテル、ホテルからいくつかのオフィスを訪ねてはミーティングを重ね、夜は会食、あるいはフライト、移動が朝の場合は、早朝、空港から次の地に。そんな行動を繰り返して、1週間ほど経過した。今はパリの空港のラウンジで、2袋目のポテトチップスをほお張りながら、コーヒーを飲み続けている。夕方の6時になっても、真昼のような日差し。この時期、日が暮れるのは、9時すぎである。ミラノ行のフライトは6時半、会食が始まるのは夜の9時すぎ、時間はたっぷりある。日本を離れると、時間の感覚を失う。それも都合のいい忘れ方をするわけで、今週も突然、最後通牒（つうちょう）のようなメールを受け取る。

「今夜、パリ時間の午前2時までに、必ず送付してください。何度もお願いしてあります。よろしく」

午後遅く、エディンバラの空港のラウンジでメールを開いたら、そんなメールがあった。実際、何度か催促を受けながら、放っておいた書評の督促である。約束事は意地でもほごにしないという方針を辛うじて貫いているのだが、いつも綱渡りを繰り返しているわけで、偉そうなことを言えるはずもない。エディンバラからパリのホテルに着くのは、夜の9時。しかもパリのホテルで食事の約束をしている。どう考えても、自分の時間が見つかるのは11時すぎ、それから書き始めて午前2時までに書き終わるだろうか。書評をする対象の本は既に読み終わっているとは言っても、早々簡単に書ける類の本でもない。書評をするのが難しいから、書くことから逃げていた本でもある。



スコットランドの首都エディンバラは冷たい夏=筆者撮影

「わかりました。必ず書いて送付をします。遅れて申し訳ありません」

書ける当てはまったくないのに、取りあえず、そんな返信メールを送付する。エディンバラからパリまで2時間、その間に内容がまとまれば、なんとかなる。ぎりぎりになると、いつものことだが、なんの根拠もないどころか、すべての理性が要求する判断を放棄して、「なんとかなるものなのだ！」と、強気になる癖が出る。IIJが食うや食わずの時代や、関連会社がチャプターイレブンになった折も、再起して、なんとかやっこられたのも、理性を越えた意志を持ち続けたからだ、まったく関連のないことを連想したりする。

IIJという企業やインターネットの将来については、最大限の理性を働かせて考え抜いてやってきたわけで、「なにがなんでもできるはずなのだ」といった、理性を超えた愚かな自信に寄りかかってきたわけではない。しかも書評を書くというのは、まったく個人的な話である。いち早く飛行機に乗り込んで対象となる本を取りだして、読むともなく考え始める。考えきって、パリに着くころには、後は書くだけというところまでまとまっているはずが、いつの間にか眠ってしまい、間もなく到着するという乗務員の言葉が耳に入って、やっと目を覚ます。時間との競争で言えば、どんどん追い込まれていくのに、まったく怠惰なままである。

第1次世界大戦が始まったのは1914年、ハプスブルグ朝の皇太子フランツ・フェルディナントがテロによって暗殺されたことに始まる。当初は誰も、この戦いの始まりが、20世紀を象徴するような悲劇的な戦争になるとは、まったく予想もしていなかった。ハプスブルグ王朝とセルビアの戦いはすぐにも終わるはずの戦いだった。それがドイツ、ロシア、フランス、イギリス、イタリアなど、ほとんどの欧州諸国を巻き込み、最後には米国の参戦にまで至る世界戦争になり、欧州の地図を一変することになるとは、開戦当時、誰ひとり想像だにできなかった。

ドイツの勃興と数百年にわたったハプスブルグ家の崩壊に至る過程は、その後、第2次世界大戦の流れとなり、歴史上、もっとも残虐で過酷と言われる20世紀の世界の始まりとなった。第1次世界大戦が従来とはまったく違う規模の戦死者を生んだ背景には、周知のように、産業革命以後、急激に発展した科学技術の進化、特に、科学の工学的な展開があり、それが軍事と融合



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、たばこ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる。



第一次世界大戦100年の追悼コンサートに集まった演奏家たち=筆者撮影

されたことによって画期的な武器が開発され、戦争の概念そのものを変えてしまったのだが、簡単な歴史の年表を眺めてすら改めて驚くのは、第1次世界大戦からハプスブルグ王朝の崩壊、そして第2次世界大戦に至る時間軸の短さである。

日本ではまったく話題にもならないようだが、今年は第1次世界大戦から100年ということで、欧州の各地で追悼記念の行事が行われている。パリでのミーティングを終えたら、週末、イタリアの古い街、ラヴェンナでリッカルド・ムーティさんの指揮によるヴェルディの「レクイエム」の演奏会に招かれていて、ひと夜だけラヴェンナまで行くことになっている。その追悼コンサートは、世界の20か国から演奏家が350人も集まって演奏する。ラヴェンナでのコンサートの翌日には、インスブルックに近い場所で、大きな追悼式があり、同じレクイエムを演奏することになっているという。100年前の出来事と言えば、太平洋戦争が終わって70年近いのだが、欧州の人々にとって、第1次世界大戦はまだ記憶に残る悲劇なのである。政治的にはともかく、日本にとっては遠い戦争だったのである。

さて、追い込まれた書評である。対象とする本は「ハプスブルグ家と東欧の20世紀」という副題がついた「赤い大公」（ティモシー・スナイダー著、池田年穂訳）で、ハプスブルグ家のヴィルヘルム公の生涯をたどりながら、第1次世界大戦からハプスブルグ王朝の消滅、第2次世界大戦からEUに至る欧州の現代史を、別な角度から光を当てながら洞察しようというものである。

ハプスブルグ家の版図という概念の上で、ポーランド王を目指したシュテファン大公の5男がヴィルヘルム公である。若くしてハプスブルグ家の版図の上でウクライナ・ハプスブルグの王を夢見ながら、ヒトラー、スターリンの跋扈（ばっこ）という時代の推移のなかでその夢が瓦解。第2次大戦後、4か国による分割統治という形のウィーンで、ウクライナと西欧との関係構築のための諜報活動をしている際、ソ連に捕らえられ1948年にキエフの牢獄で死に至った人物である。ドイツ語、フランス語、ウクライナ語、ポーランド語、イタリア語、英語の6か国語を自在に操ったヴィルヘルム公は、パリでスキャンダルにまみれ有罪となるなど、奔放な生活を送りながらも、ウクライナへの夢を捨てきれず、ソ連の監視下にあったウクライナのキエフの牢獄で死を迎える。1948年といえば、東西が決定的に分裂し、まさに冷戦が始まった象徴的な年でもある。

オスマントルコ帝国の衰退から、19世紀末には民族主義国家の設立という運動が広がり、数百年にわたったハプスブルグ家の統治が変質を繰り返しながら崩壊に至る過程を理解することは、第2次世界大戦による徹底的な破壊からEUに至る欧州を理解するうえで、もっとも重要なことのひとつであることは間違いない。書評をするうえで考えがまとまらなかったのは、ヴィルヘルム公の波乱の生涯をたどる面白さと、20世紀の欧州を歴史的に考えることが、私の能力では紡ぎ合う形にならず、平行したまま時間が経過することにしかならないことだった。私のような人間には、それぞれの時代の欧州の地図を絶えず見比べ続けることが、欧州についての理解を深めてくれる程度なのである。1500年代、1908年、1918年、1948年、2008年、それら区切りとなる年代の地図を見比べることで、改めて欧州の歴史の難しさを感じるのである。

——ウクライナは、かの近代ヨーロッパの政治形態、「民族国家」（国民国家）の生命力が試される場でもある。（略）ヨーロッパの国家統一においてはもっとも新しい集団の内の一つになる。現在注視すべきはひとつの領土のなかにひとつの国家が統合されているこの国民国家なるものの成功そのものが先行きも繁栄する前触れとなっているのか、それとも破滅の前触れとなっているのか、どちらだろうという点である。ヴィルヘルムと父親が理解していたように、歴史は国家統一の時代をもたらした。が、どんな時代とも同じで、その時代はいずれは去るということである。——

——今日では、ヨーロッパにおける成功の証は国家の独立にあるのではなくて、EUに加盟することにあるのだ。——

『赤い大公』からの引用である。EUとハプスブルグの統治の仕方は、言うまでもなく根本的に違うにしても、EUについて、なにかしら考える時に、「民族を超越したアイデンティティー」という意味で、ふと、ハプスブルグ家を思い起こすのは、ウィーンの人々のノスタルジーばかりでもない。

パリ時間の午前2時という難問については、その内容はともかく、「なんとかなるものだ」といういい加減な基本方針に乗っ取ってなんとか切り抜け、今はラヴェンナまでたどり着いたのである。ミラノは、ちょうど今日からセールの解禁日で、高級ブランド品のセールを目指して、朝からたくさんの買い物客、観光客がいっぱいである。

「イタリアの経済はなかなか上向きにならず、バカンスにしても、長い休日を取る形から、最近は一週間・二週間・バカンスとなって、週末だけリゾート地で遊ぶというつましい姿になっている」。パリからミラノに移動をした夜、友人と食事をする。「ベルルスコーニは」と聞くと、「まあ、イタリアですからね。ベルルスコーニは禁錮4年の判決を受けたのですが、高齢

ということで、毎週月曜日に高齢者のための施設で4時間の奉仕活動をすればいいことになっています。それも10カ月間のことですからね。イタリアらしいと言えば、らしいのですが」

国歌の斉唱に始まったムーティさんによるヴェルディ作曲の「レクイエム」は、4000人を超える聴衆に埋まった体育館で演奏された。音響的には悪い環境の巨大な空間の演奏だったが、追悼コンサートにふさわしい感動を与えるものだった。演奏会の後、ムーティさんを囲む形で、関係者の方々と食事をしていたら、いつの間にか日を超えて、午前1時近くになってしまった。仮眠をしてパッキングをすれば、あとは遠路、羽田に戻るだけである。取りあえずは、「なんとかなるのだ」と言い聞かせるほどの事はなくて、機内でゆっくり眠るばかりである。



観光客らでごったがえすミラノ中央駅
=筆者撮影

鈴木幸一IJJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

鈴木幸一 IJJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

読者からのコメント

団塊の凡人さん、60歳代男性

このブログを読み、歴史問題を考えさせられました。極端に言えば、第二次大戦後、ヒトラーが悪の権化とされたのは「平和回復と世界秩序のための歴史観による」悪の判定でしょう。戦前の歴史的事実だけを見れば、独国民の圧倒的支援、英国王室の一部とかフランスでのかなりの支持者の存在、米国の自動車王フォードのヒトラーへの多額の献金、戦後非難され続けるチェンバレンの宥和策等、今の歴史観では理由付け困難な事実の数々。歴史とは客観的事実の「一部」を都合よく今に利用する手段になっているようです。今の中国・韓国による歴史の政治的利用を見せつけられるにつけ「事実の積み上げと客観的検証なしの歴史」は危険だと強く感じます。それにしても、第一次世界大戦に限らず第二次大戦から、現在のパレスチナ・ウクライナ・イラク等々の、憎しみ合い・殺し合い…「人間の愚かさ、民衆の愚かさ」と民主主義の危険性」を考えざるをえません。

小倉摯門さん、60歳代男性

「赤い大公」が描いたのは欧州の壮大な歴史の一端でしかないのですから、それらに馴染みのある鈴木さんにして困難な仕事であったに違いありません。欧州の歴史に親しんだことがない私もふっと読んでみようかなという気になりましたが、その遠大さに気が重くなり鈴木さんのこのブログとネットで見付けた書評で満足することに致しました。一方で、成り行き任せを含意して「なんとかなるものなのだ！」とされるのは鈴木さんの謙遜な表現でしょうね。「なんとかするのだ！」または「なんとかできるものさ！」と意思を入れてこそ、虎変豹変を迫られたり巧遅ではなく拙速の道を選択したりして、ものごとは結果として「なんとかなるのだ」と思います。当然ながら、広深永な構えも走りながら考える覚悟も途中で軌道修正する柔軟さも賢明さも必要になる。そうであってこそ、鈴木さんの仰る「強気になる癖」と平仄が合う。意外にも上手く纏まりました(笑)。

[ビジネスリーダー トップに戻る](#)

[ビジネスリーダー Menu一覧](#)

[経営者ブログ トップ](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.